

アイザイア・バーリンと 文化自由会議

——冷戦期の「リベラルなエートス」をめぐって——⁽¹⁾

森 達 也

目次

- I 月の裏側
 - II 文化冷戦のコンテクストにおけるバーリン
 - (a) 文化冷戦と文化自由会議
 - (b) 冷戦期におけるバーリンの「政治的」活動
 - (c) 『エンカウンター』事件
 - III 冷戦とリベラリズム
 - (a) 冷戦初期の「リベラルなエートス」
 - (b) リアリティ感覚と歴史感覚
- むすびにかえて
参考文献

I 月の裏側

2010年代以降、英国の政治思想家アイザイア・バーリン（1909-1997）

- (1) 本稿は、日本イギリス哲学会第45回研究大会（オンライン開催、2021年3月21日）における個人研究報告「ある思想史家の冷戦——アイザイア・バーリンと文化自由会議」を大幅に改稿したものである。報告に対して意見を賜った方々、ならびに本稿に関して有益なコメントを頂いた佐藤一進、山越裕太、藤井達夫、安藤丈将、小須田翔、小久保大輔、塩川伸明の各氏に感謝したい。

に関する研究の主流は、従来の価値多元論とリベラリズムの関係をめぐる理論的考察から徐々に離れ、彼をリベラルな「知識人」として、20世紀の政治的コンテキストの下で理解する試みに移行しつつある⁽²⁾。そうした歴史研究から抽出されるのは、ジョン・ロールズの『正義論』に代表されるような分析的な政治理論ではなく、むしろ政治に関するリベラルの智慧、美德、あるいは政治的力量といったものである。バーリンは体系的な理論家ではない反面、現実の人間や社会の具体的な様相を読み取れることを得意としており、この能力をあらわす言葉として彼が「リアリティ感覚 (sense of reality)」や「政治的判断 (political judgment)」と呼ぶものに注目が集まっている⁽³⁾。それらは、国際政治学を中心とした従来の「リアリズム」——力と利害関心の合理的計算から政治行動を説明・予測する、または特定の政策や制度を正当化 (説得) する——とは区別される、「政治的リアリズム」の議論と近接している。政治的リアリズムとは政治理論分野における近年の研究潮流のひとつであり、比較的少数の理論的諸前提から特定の規範的内容を導出する「分析的政治理論」の手法に反対し、権力や利害、レトリックなど、様々な要素が交錯する歴史的現実における政治制度や政治的行為を、その実行可能性、判断の質、基本的な正統性要求などの観点から評価する試みである⁽⁴⁾。この潮流の下、特に冷戦期のバーリンを、政治的リアリティ感覚に優れた「リベラル・リアリスト」として評価する研究が増加している⁽⁵⁾。

(2) 代表的な研究として、Dubnov 2012, Cherniss 2013 が挙げられる。この2冊の評価に関しては、森 2016を参照。

(3) Isaiah Berlin, 'The Sense of Reality', 'Political Judgment', in SR.

(4) 政治的リアリズムの研究プログラムは未だ十分に確立していないが、今後は政治理論分野の重要な一角を占めることが予想される (cf. Sager & Sabl 2018)。バーリンと政治的リアリズムとの関係については、山岡 2019, 2021, 森 2019, Hall 2020などを参照。また新旧のリアリズムに関する広範な研究を集成した Schuett & Hollingworth 2018 が出版されており、その中の1章がバーリンに充てられている (Cherniss 2018)。

(5) Craiutu 2017, Shapiro & Steinmetz 2018, Cherniss 2019, Müller 2019,

他方で一部の論者は、こうしたリアリズム的な方向性を共有しつつ、現在の研究潮流の中ではほとんど語られない側面に注目している。歴史家のデイヴィッド・コート⁽⁶⁾はこれを「月の裏側 (the far side of the moon)」と呼んでいる。2013年に公刊された彼の著作『アイザックとアイザア——とある冷戦異端者の隠された処罰』⁽⁷⁾は、冷戦期を代表する二人のユダヤ系知識人の確執を描いている。同書の焦点は「ドイッチャー事件」⁽⁸⁾であり、そこにおいてバーリンは、自分が嫌う知識人を英国のアカデミズムから追放する権力者 (don) として登場する。こうした現実の「政治的行為者」としてのバーリンのネガティブな側面を、近年のバーリン研究者はほぼ黙殺しているとコートは主張する⁽⁹⁾。確かにバーリンはその死後も彼の「賞賛者」に取り巻かれており、かれらにはバーリンを攻撃する人物を排除する傾向があるのかもしれない。事実、2018年に公刊されたケンブリッジ・コンパニオンの文献一覧には、コートの名前も著作

Hiruta 2021.

- (6) David Caute (1936-) : 英国軍人の父親がカイロに赴任中に生まれる。エディンバラ・アカデミー、オックスフォード大学セント・アントニー・カレッジ等で教育を受け (クリストファー・ヒルの指導を受ける), 1959年から65年までオックスフォード大学オール・ソウルズ・カレッジ研究員 (この時期にバーリンとも交流したが、カレッジの雰囲気肌に合わず辞職)。1979-80年には『ニュー・ステイツマン』誌のリテラリー・エディターを務める。社会主義および冷戦期左翼の研究などで知られるほか、『コムラード・ジェイコブ』(1961年)等の小説作品もある。邦訳に『ヨーロッパの左翼』(河合秀和訳, 平凡社, 1970年)がある。
- (7) Caute 2013: xiv.
- (8) 1963年, アイザック・ドイッチャーがサセックス大学政治学教授の候補に挙がった際, 同大学副学長がドイッチャーの学問的適格性についてバーリンに意見を求めたところ, バーリンは, 彼が「私自身と同じ学問的世界に存在することを道徳的に許容できない」と返答し, 結果としてドイッチャーは教授に採用されなかった。この書簡が1969年にスクープされ, バーリンは「魔女狩り」をおこなう人物として非難された (Ignatieff 1998: 234-235/254-255)。
- (9) Caute 2013: xiii.

も見あたらず、冷戦期のリベラルとしてのバーリンを主題とする最近の論文集にも言及がない。⁽¹⁰⁾

しかしながら、この無視の主要な原因は聖人崇拜ではなく同書の内容にあると思われる。コートは(彼自身の政治的信条を反映して)非常にドイッチャー寄りであることに加え、サセックス大学に求職したドイッチャーに関して否定的な手紙を書いたバーリンの心境を「兄弟殺しの仲 (fratricidal rivalry)」に由来する一種の嫉妬心の感情と捉えている。⁽¹¹⁾しかしながら、ある書評子が冷たく突き放しているように、こうした解釈には十分な根拠がない。そもそも二人の間には「兄弟」と呼ぶような深い関係はなかった。⁽¹²⁾二人の対立の直接的な原因はむしろ、ドイッチャーがバーリンの『歴史の必然性』(1953年)に寄せた攻撃的な書評に求められる。⁽¹³⁾

だが、話はこれで終わりにはならない。コートはドイッチャー事件を中心とする両者の関係を単なる個人的な出来事で片付けず、より広い文脈において、冷戦期における反共知識人たちの欺瞞を明るみにする一事例と位置づけている。彼は『アイザックとアイザリア』に先立って「文化冷戦 (cultural Cold War)」に関する大著を世に送り出しており、その後も同じ主題に関する著作を重ねている。⁽¹⁴⁾この文脈の下ではバーリンは冷戦の文化的「戦士」であり、彼の反共的姿勢は国内外における共産主義の伸長防止という当時の米英両政府の利益に大いに奉仕したのであり、そして彼の代表作である「二つの自由概念」は西側のブルジョア資本主義体制の弁証であったと理解される。⁽¹⁵⁾

(10) Cherniss & Hardy 2018, Müller 2019.

(11) Caute 2013: xii.

(12) See, Kaiser 2013.

(13) Deutscher 1955, cf. Ignatieff 1998: 234/254.

(14) Caute 2003; 2010.

(15) 「冷戦リベラル」としてのバーリンの知的姿勢に対する批判として、上掲 Caute 2013 のほか、Arbraster 1971, Hitchens 1998, Said 2000, Tully

近年の代表的なバーリン研究者であるジョシュア・チュルニス⁽¹⁶⁾は、バーリンを米国の国益に奉仕する冷戦イデオログとする解釈を退け、冷戦期の左右の急進主義の狭間で「リベラルなエートス」（冷静さ、寛容、知的謙虚さ）を説いた優れたリアリストとして評価している。後に確認するように、彼の解釈は確かに理に適っている。だがそれでも、（後述のように）バーリンが反共色の濃い雑誌にたびたび寄稿し、ソヴィエト・ロシアの文化－政治的状况に関する記事を公表していたことは、この「文化冷戦」への少なからぬ寄与だったのではなからうか。また仮に、彼の著作群のうち重要な一部がこうした「戦争」に奉仕する目的で著わされたのだとすれば、彼の思想の普遍的価値それ自体が疑われることになるかもしれない。

ここから、彼が文化冷戦の中で果たした役割を同時期の彼の著作群の論調と突き合わせることにより、冷戦初期における彼の知的姿勢を問うという課題が浮上する。この課題への取り組みは第一に、「二つの自由概念」をはじめとするバーリンのリベラリズムをその歴史的コンテキストの下で適切に理解するという課題に貢献する。第二に、この作業を通じて、近年の「優れたリアリスト」というバーリン像のさらなる批判的な検討が可能となる。そして第三に、それは当時の英米における知識人たちが織り成す「環大西洋的な反共ネットワーク」⁽¹⁷⁾の解明に寄与するであろう。本稿は、これらのより大きな課題に着手するための準備作業と位置づけられる。以下、次節ではまず、冷戦初期における西側の文化戦略を概観した上で、そこにおけるバーリンのいわゆる「政治的」活動の内容を確認する。次に、1967年の『エンカウンター』事件を取り上げ、関係者のひとりであるバーリンの言動を、彼の知的態度の一貫性の観点から考察する。第三節では、冷戦初期におけるリベラリズムの特質のひ

2013 などがある。

(16) Cherniss 2018; 2019.

(17) 井上 2020 : 124頁。

とつが、極端な社会状況における一種の知的平衡感覚に見出されることを確認して本稿を閉じる。

II 文化冷戦のコンテクストにおけるバーリン

(a) 文化冷戦と文化自由会議

歴史家のジョン・ルイス・ギャディスは1997年の著書の冒頭で、今や冷戦は歴史研究の対象になったと宣言したが、以後、冷戦の歴史研究はその中心となるパワー・ポリティクスの側面のみならず、社会—文化的側面を含む幅広い範囲で遂行されている。「文化冷戦」とは、特に冷戦の初期において米ソ両陣営が主導した各種の文化的プロパガンダ活動を総称する言葉である。日本でも、冷戦期のアジア地域における米国の文化戦略を中心に研究が進んでいる。⁽¹⁸⁾日本語で「プロパガンダ」と聞くと「虚偽や極端に誇張された情報を用いた宣伝活動」という意味が浮かぶことが多いが、これは「ブラック・プロパガンダ」と呼ばれ、事実に基づく宣伝活動である「ホワイト・プロパガンダ」と対置される。後者には、事実を示すことで（たとえば共産主義に魅了された人びとの幻想を解くなど）「啓蒙」することや、反対に、「スペクタクル」（見世物）によって人びとを魅了することも含まれる。もちろん、その中間地帯には事実とも虚偽とも言えない「グレー」な主張や、自陣営に都合の悪い事実について沈黙する、または隠すという行為も存在している。⁽¹⁹⁾

こうした宣伝活動の重要性は戦間期にはすでに認識されており、英米両政府はそれぞれナチス・ドイツに対抗するための宣伝・情報組織を整備していた。戦後の新たな状況に対応するため、それらは改組され、また新たな手段が模索された。⁽²⁰⁾同じ時期のソ連もまた、米英に対抗する目

(18) Gaddis 1997.

(19) たとえば、福中 2008、貴志・土屋 2009、堀 2007、2016、村上 2014、藤田 2015。

(20) 齋藤 2013：4-5 頁。

的で多様な宣伝活動をおこなっていた。米英ソによる活動には、たとえば以下のものがある。

- ・各国の文化拠点や交流基金の設立（ブリティッシュ・カウンシル、フルブライト委員会など）
- ・国内外向けの雑誌の発行（ソ連向け英雑誌『ソユーズニク』など）
- ・学生団体への援助，大学との連携
- ・文化交流を通じた宣伝（ポリショイ・バレエ，レニングラード・フィルなどの海外公演）
- ・文芸誌や作家サークル，芸術団体への援助
- ・国際放送（ラジオ・フリー・ヨーロッパ，東欧向け BBC 放送など）

自由主義陣営における文化戦略の中心は米国中央情報局（CIA）であったが、これと並んで、同局が非公式に運営または援助する多様な組織が、米国のみならず世界各地に存在していたことが知られている。その援助団体のひとつが、パリに拠点を置く「文化自由会議（Congress for Cultural Freedom, CCF）」であり、その設立総会は1950年にベルリンで開催された。名誉議長団にはバートランド・ラッセル，ジョン・デューイ，ベネデット・クロッチェ，カール・ヤスパースなどの著名な哲学者が名を連ね，物理学者のロバート・オッペンハイマー，ジョージ・ケナン，レーモン・アロン，マイケル・ポランニーなど，当時の代表的な知識人たちも参加している。その活動は多岐にわたり，ソ連の共産主義体制に対する批判的な言論を会議や各種媒体において展開する一方で，西欧の思想，文化，芸術を「自由の文化」として国内外にアピールする活動を世界中でおこなった⁽²²⁾。また CCF は同盟諸国にその傘下組織をもち，英

(21) 藤田 2015：第1章を参照。

(22) See, Cauter 2003; 2010, Scott-Smith & Krabbendam 2003. CCF の活動はアジアでも活発であった (cf. Passin 1956)。1961年には第4回世界音楽

国では1951年に英国文化自由協会（British Society for Cultural Freedom, BSCF）が設立されている。⁽²³⁾

このCCFの成立には、若い反共知識人たちの積極的な関与があったことが指摘されている。設立に向けた実働部隊として活動したのが、ノンコミュニスト・レフト（NCL）と呼ばれた一群の知識人たちである。このグループの主要人物として、『真昼の暗黒』で知られるアーサー・ケストラー（著作家）、メルヴィン・J・ラスキー（ジャーナリスト）、シドニー・フック（反共団体代表）、ニコラス・ナボコフ（作曲家）、アーサー・シュレジンジャー・ジュニア（歴史家）、スティーヴン・スペンダー（詩人）、ヒュー・トレヴァー・ローパー（歴史家）、そしてアイザイア・バーリンらが挙げられる。彼らの共通点は、政治的には中道から左派であるにもかかわらず、スターリン体制に反対する点で「反共」であったことである（この点は、当時の西側の左派知識人の多くが戦間期から冷戦初期にかけてソ連支持に傾いたのとは対照的である）。⁽²⁴⁾この反共的態度は当時の国際情勢の中で親米リベラルのイデオロギー形成に寄与することとなる。

(b) 冷戦期におけるバーリンの「政治的」活動

バーリンが幼少期からソヴィエトの政治体制を嫌悪していたことは知られている。1909年にラトヴィアのリガに生まれた彼は8歳でロシア革命を経験し、その後1921年には一家で英国への亡命を強いられた。第二

祭が東京で開催され、アイザック・スターンやニューヨーク・フィルハーモニーが来日して話題を集めた一方で、「反共団体による音楽祭」という非難の声が上がり、大規模な反対運動が展開された（沼野 2021：171-172頁）。

(23) 齋藤 2013：222-224頁。

(24) Cf. 堀 2010. メンバーの多くがユダヤ系であり、ソ連領内のユダヤ人虐殺に加担したスターリンに対する強い反発が見られた。またフックらトロツキストの元共産主義者の転向も特徴的である。

次大戦中にはソ連領内に留まっていたユダヤ人の親類のほとんどを亡くし、1945年のモスクワ・レニングラード訪問の際には、自由を厳しく制限された市民や芸術家たち（とりわけ詩人のアンナ・アフマートヴァとボリス・パステルナーク）の姿を目の当たりにした。他方、当時の英国社会では社会主義に対する幅広い支持が存在していたこともあり、ソ連に対する好意的な意見が目立っていた。特に1941年の独ソ戦開始以後は「情報省も報道機関やBBCに対してソ連寄りの報道を促した。……やがて戦後の対ソ協調の可能性について政府高官が悲観的となっても、国内メディアは必ずしも対ソ強硬論に与することはなかった」⁽²⁵⁾。そうした中でバーリンは、一方でハロルド・ラスキやE・H・カーらのソ連シンパと距離を取り、他方で帝国主義者や文化的保守主義者に迎合することも避けた。彼は基本的には労働党支持者である（ユダヤ系英国人の多くがそうであった）と同時に、反共主義者でもあるという、当時としてはマイナーな立場にあった。⁽²⁶⁾

1940年、半ば偶然の成り行きから、バーリンは米国での戦時勤務の機会を得た。⁽²⁷⁾ 最初は英国情報省の外部局員としてニューヨークで勤務し、42年からは外務省のスタッフとしてワシントンで活動するが、彼はこの5年にわたる米国滞在中に（オール・ソウルズ・カレッジのコネクションも手伝って）数多くの政治家や知識人たちと出会い、戦後も交流を続

(25) 齋藤 2013：19-20頁。

(26) Dubnov 2012: 120. ただしバーリンは戦後の労働党政権のパレスティナ政策に対して非常に批判的であり、（反共という点では立場を同じくする）アーネスト・ベヴィンを激しく非難している（POI236）。バーリンがパレスティナを英国委任統治下での多民族地域にすることを望んだのに対し、ベヴィンはナショナリズムの勃興に際して帝国の直接統治をことごとく手放そうとした。その結果、パレスティナはコントロールを失い、修正主義者たちの武装闘争を許すことになったとバーリンは見ていた。

(27) Cf. Ignatieff 1998: 95-101/106-112. この時期におけるバーリンの「公務」、つまり英国政府のスタッフとしての多岐にわたる活動については、細谷 2005：第5章を見よ。

けた。とりわけ本稿との関連で重要なのは、バーリンが当時の米国のソヴィエト・ロシア研究に与えた影響である。彼はワシントンの英国大使館勤務の間にブルッキングス研究所にたびたび出入りしており、ハーバード大学のロシア研究センター（Russian Research Center, PRC）のメンバーとも交流している⁽²⁸⁾。当時国務省の官僚であったジョージ・ケナンとは1942年にワシントンで出会っている⁽²⁹⁾。若い頃にチャーホフの研究を志していたケナンと、ロシア文学に精通するバーリンは自然と意気投合したようである。両者はソ連に関しても、近代的なその外観の背後には古いロシア的な要素が存在しているという見方や、ソ連が西側と同盟関係に入ることはないとの予想を共有していた⁽³⁰⁾。彼はケナンの「封じ込め」政策にも基本的に同意していたが、この「封じ込め」の意味するところは必ずしも軍事的な強硬策ではなく、より柔軟に、政治的および文化的手段を用いてソ連のさらなる拡大を断念させることにあった⁽³¹⁾。この時期にバーリンは、現実世界の圧倒的な諸力を前にして現実的かつ賢明な判断を編み出す「リアリティ感覚」についての思索を深め、それは1949年に『フォーリン・アフェアーズ』誌に掲載された「20世紀の政治思想」に結実した⁽³²⁾。他方でアーサー・シュレジンジャー・ジュニアとは1943年の冬以来、生涯にわたる親交を保ち、事あるごとに互いを訪ねあう仲であった⁽³³⁾。彼は1949年に反共左派のマニフェストとなる『ザ・ヴァ

(28) SM xiv, Cherniss 2013: 80.

(29) Ignatieff 1998: 110/122.

(30) Gaddis 2011: 210-214. Cf. Lukacs 2007: 36/42.

(31) Cherniss 2013: 82.

(32) ケナンはのちにバーリンの「20世紀の政治思想」に対する長文の感想を送っている（Ignatieff 1998: 200/218-219）。1951年2月13日付のバーリンの返信は「ジョージ・ケナンへの手紙」として *Liberty (Four Essays on Liberty)* の改訂版に収録されている（L 336-344, 以下 GK と表記）。

(33) オックスフォードボドリアン図書館のアイザイア・バーリン・ペーパーズ（MS. Berlin）には、シュレジンジャー・ジュニアからバーリンに宛てた多数の書簡が保管されている。See also, Schlesinger 2013.

『イタル・センター』を公刊するが、そこにはバーリンと議論を重ねた影響が見て取れる。⁽³⁴⁾

終戦後、バーリンは英国での学究生活に戻るが、米国で得たコネクションはその後も生き続けた。彼は50年代以降、頻繁に米国の大学で講義を行い、一時は米国に転居することも考えるほどであった。そうした中、上記の CCF および BSCF が相次いで設立される運びとなり、彼は友人たちと共にそこに参加することになった。とりわけ、CCF の資金援助により1953年に英国で創刊された月刊高級文芸誌『エンカウンター』の編集主任は、彼の親しい友人である詩人のスティーヴン・スペンダーが務めており、⁽³⁵⁾ バーリンはロシア・インテリゲンツィアに関する1954年の講義を同誌に連載するなどの貢献をしている。またこの同じ時期に、彼は『フォーリン・アフェアーズ』誌にソヴィエト・ロシアの政治および文化・芸術の状況に関する論文を（しばしば偽名で）寄稿している。⁽³⁶⁾

この時期におけるバーリンのもうひとつの活動媒体はラジオであった。⁽³⁷⁾ 彼は、当時新たに立ち上げられた BBC サード・プログラム（ラジオ第三放送の前身）の番組制作を担当していた知人のアンナ・カリンから⁽³⁸⁾

(34) Schlesinger 1949, Cherniss 2013: 72.

(35) もうひとりの編集主任はアーヴィング・クリストルであり、1958年にはクリストルに代わってメルヴィン・ラスキーがこれを務めた。

(36) 「20世紀の政治思想」以降、1950年代に『フォーリン・アフェアーズ』誌にバーリンが寄稿した論文は以下の3本である。(Under pseudonym 'O. Utis') 'Generalissimo Stalin and the Art of Government', *Foreign Affairs* 30 (1952), pp. 197-214. 'The Silence in Russian Culture', *Foreign Affairs* 36 (1957), pp. 1-24. (Under pseudonym 'L.') 'The Soviet Intelligentsia', *Foreign Affairs* 36 (1957), pp. 122-130. これらはいずれもバーリンの死後に出版された論文集 *The Soviet Mind* (SM) に収録されている。このうち、「20世紀の政治思想」およびスターリンの統治術に関する論考は、同誌がバーリンに寄稿を求めたものである (Ignatieff 1998: 171/187)。

(37) バーリンは終戦直後の時期にすでに BBC から放送出演依頼を受けていたようである (Ignatieff 1998: 170/186)。

出演をオファーされ、1952年に「自由とその敵」と題した連続講演を⁽³⁹⁾行った。この講演に関して注目すべきはまず、その主題である。ルソーの民主主義論を全体主義の思想的源泉とする彼の議論は、同時期にリベラル・デモクラシーと全体主義デモクラシーの区別を行ったことで知られるヤコブ（ジェイコブ）・タルモンの議論との平行関係が、あるいはカール・ポパーやハンナ・アーレントの議論との類似性が認められる。これに加えて、上述のようにラジオ放送は当時における英国の対ソ文化戦略の主要な「武器」のひとつでもあった。スターリニズムの是非をめぐって国内外でプロパガンダ合戦が繰り広げられている重要な時期に、彼がラジオを通して全体主義の思想的起源を説いたという事実は、彼の価値多元論思想との関連からのみならず、文化冷戦というコンテキストの下でも理解される必要があるだろう。その後もバーリンはたびたびラジオやテレビジョンに登場し、新しい公共知識人のスタイルを確立した人物のひとりとなった。

他の文化活動として、イーゴリ・ストラヴィンスキー作曲の宗教的バラッド『アブラハムとイサク』への製作協力がある。両者のコラボレーションは、CCFの支援を受けた文化事業である世界音楽祭を主導するニコラス・ナボコフの発案だったようである。⁽⁴⁰⁾バーリンは1956年⁽⁴¹⁾にナボ

(38) Anna 'Niouta' Kallin (1896-1984) はモスクワ生まれのロシア系ユダヤ人。ドイツで教育を受け、1921年に渡英。フリーランス活動ののち1940年からBBCに戦時勤務（ロシア放送の傍受）、1946年から番組プロデューサーとして、BBC サード・プログラムの運営などに関わる。バーリンとは1946年以後の個人的な交流があった（L-II 794, Ignatieff 1998: 204/222-223）。BBC サード・プログラムもまた、CCFの傘下組織であるBSCFのメンバーであった（Saunders 1999: 103, Wilford 2003: 196）。また当時BBCに勤務していたエリック・ホブズボームは、彼女の下で教養番組の企画を担当していた（エヴァンス 2021：上233-236頁）。

(39) 'Freedom and Its Betrayal: Six Enemies of Human Liberty' (broadcast, 1952), published as FIB in 2002.

(40) 1959年、ストラヴィンスキーは日本各地を訪れ、NHK交響楽団を指

コフの紹介でストラヴィンスキーと面会している。その後、1961年10月にバーリン宅に招かれた際、ストラヴィンスキーはイスラエル国から委嘱されたイェルサレム祭のための作品のアイデアについてバーリンに相談をもちかけた。バーリンはヘブライ語の聖書を取り出して「アブラハムによるイサクの捕縛」を提案し、英訳からヘブライ語の音訳を作成して後日ストラヴィンスキーに送った。作品が初演された1964年にはストラヴィンスキーと共にイェルサレムを訪れている。⁽⁴²⁾

(c) 『エンカウンター』事件

冷戦が第二の頂点を迎えつつあった1961年、ピッグス湾事件に CIA の関与があったとする記事に対して『ニューヨーク・タイムズ』紙が不掲載の判断を下した際に、同紙の発行人であるアーサー・ヘイズ・サルツバーガーと CIA 長官アレン・ダレスとの親密な関係が疑われた。⁽⁴³⁾その後、ベトナム戦争を経て政府の方針に対する市民の不満が高まる中、NYT は世代交代に伴って方針を転換し、政府に対してやや批判的な姿勢を取るようになったが、それは若い世代を中心とする急進的な左派の人びとを満足させるものではなかった。反戦運動と学生運動の高まりの中で、大手新聞社の保守的な姿勢に苛立つ若者たちの一部は、地下出版のメディアを通じて政府批判を繰り広げるようになった。そのひとつが

揮している (Craft 1972: 79-91/上256-270頁)。これは当初、ナボコフが主導する東京世界音楽祭のための来日であったが、音楽祭のほうは1961年に延期された。

(41) イグナティエフの伝記では1958年となっているが、ロバート・クラフトの手記によれば、それは1956年12月10日のことであった (Ignatieff 1998: 237/257, Craft 1972: 48/上212頁)。

(42) Ignatieff 1998: 238/258. See also, L-III 62-63, 197-203, Craft 1972: 123, 256/上324-325頁, 下147-148頁。

(43) Vries 2012: 1080. ちなみにバーリンは戦時中のニューヨークでサルツバーガーと面会しているが、あまり良い印象を抱かなかったようである (Ignatieff 1998: 105/116)。

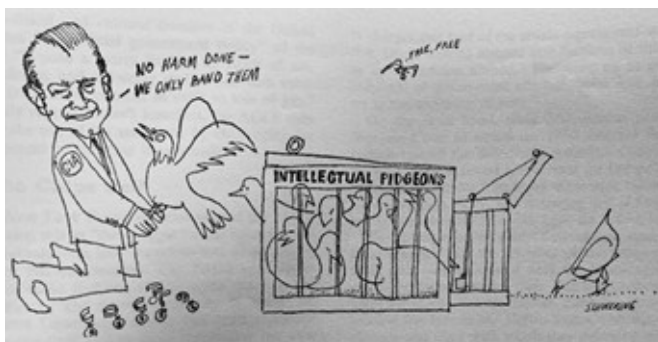


図1 (Lasch 1967: 204)

1962年に創刊された『塁壁 (*Ramparts*)』であり、同誌は1964年に NYT が行った非政府組織に対する CIA の関与疑惑についての「手ぬるい」追及をよしとせず、独自の綿密な調査の後、1967年2月14日の NYT と『ワシントン・ポスト』紙に全面広告を打ち、全米学生組織 (NSA) や CCF をはじめとする非政府団体に対する CIA の長期にわたる関与を暴露した⁽⁴⁴⁾。これは CCF の傘下にあった『エンカウンター』誌にも波及し、編集主任のスペンダーをはじめとした関係者が対応に追われることになった。つまり同誌は独立性のない「政府の広報雑誌」とみなされ、信用を失うことが危惧されたのである。この件でスペンダーは編集長を辞任し、バーリンも「関係者」の一人としてその責任を問われることになった。このとき、この問題を継続的に追っていた『ネイション』誌に強い調子の記事を書いたのがクリストファー・ラッシュであり、彼は CCF と政府の関係を「知識人の裏切り」として書き立てた。つまり、米国政府は利益供与を通じて知識人たちを「操り人形」に仕立てたというのである (図1)。その後1999年に、ノンフィクション作家のフランセス・ストーン・ソーンダースが『笛吹きに金を与えたのは誰か (*Who Paid the Piper?*)』と題した著作の中でこのスキャンダルを再訪し

(44) Vries 2012: 1084.

(45) ている。同書は、冒頭で触れたデイヴィッド・コートの文化冷戦に関する一連の著作をはじめ、以後に相次いで刊行される文化冷戦に関する研究の先鞭をつけたという意味でも注目に値する。

『エンカウンター』事件との関係で本稿が問うべきは、第一に、バーリンは『エンカウンター』誌にどれほどコミットしており、どのような責任があるのかという点であり、第二に、これによって彼の思想的貫性が損なわれるかどうかという点である。

まず、『エンカウンター』誌に対するバーリンのコミットメントの程度であるが、彼が同誌に寄せた論考は実のところそれほど多くはない。アイザイア・バーリン・リテラリー・トラステーズが管理する『アイザイア・バーリン・ヴァーチャル・ライブラリー』(IBVL)が提供している著作目録によれば、それらは以下の7本である。⁽⁴⁶⁾

- [a] ‘A Marvellous Decade: Literature and Social Criticism in Russia, 1838-48’, Northcliffe Lectures for 1954.
- I. ‘1838-48: The Birth of the Russian Intelligentsia’, *Encounter* 4 no. 6 (June 1955), pp.27-39.
 - II. ‘1838-48: German Romanticism in Petersburg and Moscow’, *Encounter* 5 no. 11 (November 1955), pp.21-29.
 - III. ‘Belinsky: Moralist and Prophet’, *Encounter* 5 no. 12 (December 1955), pp.22-43.

(45) Saunders 1999a. 米国版の表題は *The Cultural Cold War: The CIA and the World of Arts and Letters* (Saunders 1999b) である。

(46) 他に、バーリンの著作を肯定的に評価する(彼に友人たちによる)レビューは時折掲載されているが、これらは同誌の性質からしてきわめて自然なことである。Irving Kristol, ‘The Judgement of Clio’ (review of *Historical Inevitability*), *Encounter*, January 1955, 67-9. Dwight Macdonald, ‘On the Rightness of Mr. Berlin’ (review of *Two Concepts of Liberty*), *Encounter*, April 1959, 79-85.

- [b] Introduction to Franco Venturi, *Roots of Revolution* (London, 1960), repr. as 'Russian Populism' in *Encounter* 15 No 1 (July 1960), pp. 13-28.
- [c] 'Tolstoy and Enlightenment', Hermon Ould Memorial Lecture for 1960, *Encounter* 16 no.2 (February 1961), pp. 29-40.
- [d] 'Herder and the Enlightenment', repr. as 'J. G. Herder', *Encounter* 25 no.1 (July 1965), pp. 29-48, no.2 (August 1965), pp. 42-51.
- [e] 'L. B. Namier: A Personal Impression', in Martin Gilbert (ed.), *A Century of Conflict, 1850-1950: Essays for A. J. P. Taylor* (London, 1966: Hamish Hamilton), repr. in *Encounter* 27 no.5 (November 1966), pp. 32-42.

ここから分かるのは、まず、バーリンが同誌の常連ではなく「散発的な」寄稿者だったということである。⁽⁴⁷⁾ここに、同じ時期にCIAから資金供与があったとされる『パルティザン・レビュー』誌掲載の⁽⁴⁸⁾記事を合わせても、その合計は9本(1967年以降の1本を除く)にすぎない。また、掲載記事の大半はオリジナルのものではなく、大部分が過去の公開講義の抄録であることに加えて、彼はこれらの論考を後にほぼそのままの形で自身の論文集に再録している。そのおかげで同誌掲載の記事はいずれも数多くの読者による批評を耐え抜き、今日に至るまで版を重ねている。19世紀のロシア・インテリゲンツィアに関する連載 [a] は、オックスフォード大学の寄付講座での講義を再録したものである。ロシアの民衆

(47) Cherniss 2013: 74.

(48) 'The Energy of Pasternak', review of *Selected Writings* by Boris Pasternak, *Partisan Review* 17 (1950), pp. 748-51. 'A View of Russian Literature', review of *The Epic of Russian Literature* by Marc Slonim, *Partisan Review* 17 (1950), pp. 617-23. 'Nationalism: Past Neglect and Present Power', *Partisan Review* 46 (1979), pp. 337-58.

主義に関するエッセイ [c] は、イタリアの歴史家フランコ・ヴェントゥーリの著作に寄せた序文の転載であり、バーリンは1967年のポピュリズムに関する国際会議においてもこの主題について論じている。⁽⁴⁹⁾これらとトルストイに関する論考 [b] は、1978年に出版された彼の論文集『ロシアの思想家たち』(RT) に収録されている。ヘルダー論 [d] は1965年の公開講義の抄録であり、1976年に『ヴィーコとヘルダー』(VH) として公刊される彼の著作の一部を構成している。高名な歴史家であるネイミアの人物像を描いた小品 [e] は、1980年に出版されたエッセイ集『個人的印象』(PI) に収録されている。一般的に言って、特定の政治的意図を滑り込ませた時事的な文章の著者は、過去にそれを執筆した事実を否認するか、あるいは、その役割を終えた文章が世間から速やかに忘却されることを望む。それゆえ、これらの記事を反共プロパガンダ活動の積極的な企てと見做すことは——『エンカウンター』誌の読者を増やすという役割を果たしたことを別とすれば——困難であろう。

次に、記事の内容であるが、問題となる時期に寄稿された論考の半数以上がロシアに関するものであるのは確かである。だが、これらは「文化冷戦」への貢献を意識したものと言えるだろうか。まず、これらの論考はソ連の政治体制を直接に批判する内容を含んでいない。加えて、それらはロシアに対するバーリン自身の知的関心、個人的経験、および政治的信条から発しており、他者からの特定の要求を請けて書かれたものでないことは、彼の研究者あるいは読者であれば誰もが認めるところであろう。この件について、バーリンの伝記著者であるマイケル・イグナティエフは次のように書いている。

彼が1954年から56年の間に同誌に発表したロシア・インテリゲンツィアに関する研究を、当時のイデオロギー闘争における一撃と見

(49) Cf. Ionescu & Gellner 1969.

做すのはこじつけであろう。〔原文改行〕彼の『フォーリン・アフェアーズ』の諸論文が単に冷戦のプロパガンダ記事だったわけでもない。これらの論文は20世紀の全体主義の誘惑を総体的に理解しようとする真剣な試みであり、広く影響力のある読者を獲得したが、チャールズ・ポーレンのように人並み以上にこうした問題にかかわり合っていた友人は、共産主義の悪を十分なエネルギーをこめて非難⁽⁵⁰⁾していないと感じたのである。

アイリーン・ケリーによれば、ロシア思想に対するバーリンのアプローチは、ロシア史研究を冷戦のイデオロギー的武器として用いる当時の支配的な研究傾向とは鋭い対立を示している⁽⁵¹⁾。教条的な反共主義者とは一線を画すかたちで、バーリンはソヴィエト・ロシアに対してより複雑な、両義的とも受け取れる態度を示していた。その理由をアンジェイ・ヴァリツキは、バーリンがソヴィエト・ロシアの「ソヴィエト的側面」と「ロシア的側面」とを注意深く区別していた⁽⁵²⁾という点に見出している。彼はロシアの文化的遺産の豊穡さと、その生命力の持続——それはヘルダー的な意味での「民衆的なもの」であり、アフマートヴァやパステルナークのような国民的詩人はまさしくそれを「体现」していた——を信じていたが、他方でソヴィエト体制を支える公式の諸教義を、決定論的で機械的画一性に支配された、それゆえ人間の自由と道徳性を破壊するものだと考えた。彼が熱心に論じたトルストイ、ベリンスキー、ゲルツェン、トゥルゲーネフはいずれも、そうした決定論の教義を退けるために格闘した人びとであった。すなわち、「冷戦リベラリズムに対する彼〔バーリン〕の最も顕著な貢献は……ロシア・インテリゲンツィアの偉大な思想家たちを、批判の対象ではなく、自由のための普遍的な闘争

(50) Ignatieff 1998: 199-200/218. 訳文一部修正。

(51) Kelly 2001: 9.

(52) Walicki 2007: 47-48.

における同盟者として用いたこと⁽⁵³⁾にあった」。1950年代の諸論考に展開された彼の自由の哲学は、こうした知的—政治的コンテクストから生じたものであって、しばしば批判者たちが彼に帰するような、当時の西側の政治経済体制の弁証として構想されたものではなかったのである。

クリストファー・ラッシュによる「知識人の裏切り」という非難についてはどうであろうか。仮に、エドワード・サイードに倣って、知識人のアイデンティティを「真実を述べること」に⁽⁵⁴⁾求めるならば、バーリンはこの基準をクリアしている。彼はいわゆる「フェイク・ニュース」を書き立てたわけではない。他の媒体におけるのと同様に、彼は『エンカウンター』誌においても自分自身の思想信条を率直に表明し、上述のように、これらの論考を人目に付く場所に置き続けた。確かに彼はソ連を批判する姿勢を崩さなかったが、その姿勢はむしろ彼自身の思想の一貫性と知的誠実さを示すものであって、「欺瞞」であるとは——仮に知識人が完全に「浮遊する」存在ではあり得ないとすれば——言えない。

次に、バーリンは CCF および『エンカウンター』誌に対する CIA の資金供与を知っていたか否かという点であるが、彼は、自分自身も、また友人であるスティーヴン・スペンダーも、資金供与の事実を知らされていなかったと回想⁽⁵⁵⁾している。他方でジャーナリストのクリストファー・ヒッチンスは、イグナティエフの伝記中の記述に対して、『エンカウンター』誌に関する否認は、文字通りに解釈された場合、われわれが想像するよりもバーリンが異常に無頓着 (incurious) または愚鈍であったか、あるいは彼がワシントンでの時間を無駄にしていたことを意味する」(つまり普通に考えてバーリンがこれを知らなかったはずがない)⁽⁵⁶⁾と主張しており、ソーンダースもこれと同意見である。他方でバー

(53) Walicki 2007: 51.

(54) Said 1996.

(55) PI 354, Ignatieff 1998: 199/218.

(56) Hitchens 1998; Saunders 1999: 387. Cf. Cauter 2013: 208. コートが言及

リン書簡集の編者は、かれらの推論は「不十分な証拠と侮蔑的な言葉遣いによる告発」であり、バーリンその他の関係者の資料と「食い違っている」、と強く非難している⁽⁵⁷⁾。

決定的な証拠を欠いた状況でこの件に最終的な決着をつけるのは困難であるが、本稿の問いに対する暫定的な答えは得られそうである。まず、アーサー・シュレジンジャー・ジュニアの伝記作家は次のように記している。「バーリンは、CCFが何らかの米国政府の資金を得ていることを漠然と知っていた。「彼は私たちの関与を知っていた」とCIAのローレンス・ド・ヌーフヴィルは後に言った。「誰が彼に言ったかはわかりませんが、それはワシントンの彼の友人の一人だったと思います」⁽⁵⁸⁾」。

「漠然と知っていた」とすれば、それは何を意味するだろうか。同書の著者はこれに続けて晩年のバーリンの書簡を（イグナティエフの伝記からの引用で）紹介している。

私〔バーリン〕は米国筋が資金を供与していることには少しも反対でなかった。私は米国支持で反ソ連だったし（今もそうだ）、もし資金源が明らかにされたとしても、少しも気にしなかっただろう。……私や私と同じような人間の大きい気になったことは、独立していると繰り返し主張していた雑誌が、実は米国の秘密諜報部に雇われていたことがわかったことだった。（J・リー宛、1994年11月16日付⁽⁵⁹⁾）

つまり、ケナンと共に冷戦の最初期から英米両政府の文化戦略を熟知し

しているメルヴィン・ラスキーへの手紙は公刊された書簡集には収録されていないが、ポドリアン図書館のアイザリア・バーリン・ペーパーズに所蔵されている（MS Berlin 264, fols. 52-56, 79-84）。

(57) L-II: 432 fn.

(58) Aldous 2017: 145, 傍点は引用者。

(59) Ignatieff 1998: 199/218.

ていた（あるいは、その構想に間接的に参画していたかもしれない）バーリンにとって、この事実は何ら驚くべきことではなかったということである。

冷戦期における CIA と英国左派との関係を研究したヒュー・ウィルフォードによれば、スティーヴン・スペンダーの編集方針によって、『エンカウンター』誌は（当初想定されたような）世界に向けた自由文化の伝道のためではなく、むしろ英国の知識人たちが自国の文化と芸術を自由に論じる場としてもっぱら活用された⁽⁶⁰⁾。スペンダーは特に、『エンカウンター』誌が CCF の拡声器にすぎないと受け取られることを警戒していたという⁽⁶¹⁾。1967年の暴露によりスペンダーはショックを受けて編集主任を辞したが、彼の懸念はおそらく CIA による資金供与の事実それ自体よりもむしろ、バーリンと同様、風評による同誌の信用低下であったと思われる。そして同誌に関わった英国の知識人たちは総じてこのスキャンダルに無頓着であり、「裏切られた」という感覚に乏しかった。かれらは当初から CCF の意向をあまり意識せず、同誌を自分たち自身の目的のために活用していたのである⁽⁶²⁾。確かにこの事件は、『エンカウンター』誌が米国政府の影響下にあるという評判を広め、その信用を低下させた。しかしながらそうした世評と、同誌の論調が実際に独立的であったか否かとは別の問題である。バーリン自身は（またおそらくメンバーの大半は）政府や CIA の意向とは無関係に、『エンカウンター』

(60) メアリー・マッカーシーはハンナ・アーレント宛の書簡の中で同誌を酷評している。『『エンカウンター』をごらんになって？ これときたら間違いなく退屈この上ない代物、とうに死んで腐りかけた学部学生の校友会雑誌のようです』（1953年4月10日付、Brightman 1995: 14/66）。だがマッカーシーもまたスターリニズムから距離を取る NCL のひとりであり、反共色の強い『パルティザン・レビュー』に寄稿し、シドニー・フックと共に「知的自由のための米国人（Americans for Intellectual Freedom）」の一員であった（福中 2008: 252頁）。

(61) Wilford 2003: 264.

(62) Op. cit., 288-289.

誌上で自由な言論活動を展開していたのであろう。トニー・ジャットはこの点を次のように冷静に捉えている。

その意味するところ——アメリカ政府がヨーロッパで反共産主義文化の特約店にこっそり助成金を出していたということ——は、今こうして振り返って考えるほどには深刻なことではなかつたろう。共産党の、さらには「最前線」の定期行物やあらゆる種類の文化的生産物がモスクワからの密かな助成を受けていたとき、米国の後ろ盾があったからといって CCF の著者たちは当惑などしていなかったにちがいない。アーサー・ケストラーにせよレーモン・アロンにせよイグナツィオ・シローネにせよ、共産主義に対して強硬路線を取るのに米国からの正式な激励など必要としていなかったし、彼ら自身の米国に対する批判的見解が、ワシントンの会計部長の意向に合うようトーンダウンしたとか、修正・削除されたという証拠はまったくないのである。⁽⁶³⁾

最後に、バーリンと CIA との関係についてであるが、ソーンダースは両者の関係を示す直接の証拠がないとしても、「少なくとも、バーリンは CIA と非公式の関係を享受していた」と推測し、今後の研究課題として⁽⁶⁴⁾いる。たしかに、バーリンの周辺には CIA と関係を有する多数の人物が存在していた。CIA の設立に助力したケナンをはじめ、シュレジンジャー・ジュニアがシドニー・フック（当時 CIA と協力関係にあった）の誘いを受けて1950年の文化自由会議に参加したこと、⁽⁶⁵⁾メルヴィン・ラスキーが元米国情報機関員であったこと——ここにバーリンの名

(63) Judt 2005: 223/上287頁。

(64) Saunders 1999: 471.

(65) Aldous 2017: 141-142.

(66) Lasch 1967: 198.

前を入れても何ら不自然ではない。しかしながら、少なくともバーリンがCIAの指令または意向を受けて活動したという証拠は今のところ存在しない。そもそも、戦時中の彼は英国外務省および情報省の指令に服していたのであり、そうした人物と米国政府が直接に関係を結ぶということは、外交上の配慮からしても、通常はまずあり得ないと考えられる。⁽⁶⁷⁾

III 冷戦とリベラリズム

(a) 冷戦初期の「リベラルなエートス」

ヘレナ・ローゼンブラットはリベラリズムの歴史に関する最近の著書の中でシュレジンジャー・ジュニアとバーリンの名前を挙げ、第二次世界大戦の経験と冷戦という状況の中で、(特に米国の)リベラルが全体主義に対抗するという「防衛的な姿勢」を取るようになり、その結果、リベラリズムの特に平等主義的な遺産が放棄され、その思想内容がやせ細っていったと論じている。⁽⁶⁸⁾この時期のリベラリズムが反共主義・反全体主義に彩られ、その主張が個人主義に傾いた——そして西側諸国は米国主導のもと、しばしば誇張された「自由」の理想に固執した——のは事実であろう。だが、ソ連による東側諸国の衛星化や各種のプロパガンダ活動、さらには直接の軍事行動に直面した西側諸国が「防衛的」姿勢を示したのは、ある意味で自然なことであり、CCFや『エンカウンター』誌は、この対抗的プロパガンダ活動のコンテクストにおいて適切に理解される。⁽⁶⁹⁾その上で、この活動が度を越してそれ自体の理念を否定する

(67) Cf. Ignatieff 1998: 199/218. この点に関してはこれ以上の証拠を得られなかったため、読者諸氏の教示を乞いたい。ソーンドースは『ドクトル・ジバゴ』をめぐる論考の中でバーリンとCIAとの関係を再度推論しているが (Saunders 2014)、同書に対しては、彼女が強い先入見をもってバーリンを解釈しているという批判がなされている (Wolf 2021)。

(68) Rosenblatt 2018: 271-272/285-286.

(69) ケナンの評伝の著者は次のように書いている。「米国中央情報局の設

という矛盾を犯すこと——たとえば種々の虚偽宣伝や隠蔽、暗殺、拷問——を危惧する人びとは、左右のラディカリズムと比較して相対的に抑制された形態でそれら対抗的活動を実施することを望んだ。ここから、冷戦初期に特有のリベラルな「エートス」という、あまり目立たないが重要な知的—政治的姿勢が生み出されたという理解が可能となる。このような解釈は、政治の領域ではより大きな悪を避けるために「必要な悪」を許容すること——すなわち諸価値のトレード・オフ——がしばしば避けられないが、政治的行為者はその中で可能な最善の判断を模索することが期待されるという、政治的リアリズムの基本的な視座と親和的である⁽⁷⁰⁾。

そうした姿勢がケストラー、バーナム、フック、ラスキーといった共産主義からの「転向者たち」⁽⁷¹⁾よりも、バーリンやシュレジンジャー・ジュニア、さらにはケナンのような、もとより共産主義に懐疑的な（かつ、教条的な保守でもない）人びとから発せられた点は、このエートスがイデオロギーの種類ではなく、むしろイデオロギーとの距離感の問題であることを示唆している。つまり、この時期の諸論考の中でバーリンが繰り返し強調したように、特定の理論や主義への絶対的な忠誠は、政

置、東欧におけるいくつかの「秘密」作戦、「心理戦争 (Psychological Warfare)」と称される活動、自由ヨーロッパ委員会の設置、自由ヨーロッパ放送 (Radio Free Europe) や自由放送 (Radio Liberty) といった強力なラジオ放送局の設置など、これらすべては1948年末と1949年に起きた。これらすべての活動を、ケナンは当時支持した」。そうした政策が「欧州分断を恒久的なものとして容認せず、欧州大陸の中心部から米ロが相互に撤退する」ことを、彼は祈念していた (Lukacs 2007: 100-101/110)。おそらくバーリンも同意見であっただろう。

(70) Cf. Sagar & Sabl 2018: 7.

(71) ヒュー・ウィルフォードは、CCFを含むCIAの非公然キャンペーンを積極的に主導した人物として、元共産主義者のフック、バーナム、ケストラーを（そして欧州との橋渡し役としてラスキーを）挙げている (Wilford 2003: 92, 102)。

治における現実的な判断を導かないということである。⁽⁷²⁾この点は、バーリンがケナンに送った1951年2月13日付の書簡においても確認できる。

……全体主義は、極端であり、歪んではいるけれど、その実、ごくありふれた精神の態度のありようであり、私たちの国々にも決してみられないものではないのだ、と。〔原文改行〕私のこの見解については、E・H・カーが、6月の『タイムズ・リテラリー・サプリメント』誌の巻頭記事で、かなり乱暴な攻撃を展開していました。その記事を読み、私は自分の認識が、思っていたよりもずっと正しいにちがいないと確信しました。というのも、彼の著作は、私が分析を試みてきた動向をそのぐらいよく示す症例に属していましたし、彼自身が、正しくも、私の書いた記事を自分の陣営に対する攻撃だと受け取っていましたから。〔中略〕E・H・カーや、アーサー・ケストラーや、ジェームズ・バーナムや、ハロルド・ラスキの書いたものを見れば、あちらこちらに見当たることです。⁽⁷³⁾

これはCCF設立当時のバーリンの見解であって、後になってからの(改変されたかもしれない)記憶による発言ではない。この時点ですでに、彼は同会議の主要人物であるケストラーやバーナムと、自分やケナンとの決定的な相違を看取していたのである。⁽⁷⁴⁾

(72) 『ハリネズミと狐』(1953年)、「リアリティ感覚」(1953年)、「政治におけるリアリズム」(1954年)、「政治的判断」(1957年)などがこれに該当する。See HF, SR 1-66, POI 163-172. バーリンの「リアリティ感覚」が、トルストイやアレクサンドル・ゲルツェンをはじめとするロシア思想の摂取を通じて涵養されたという点については、木部 2014, 濱 2017, 仁井田 2021を参照。

(73) GK 343/90-91.

(74) バーリンは確かに反ソ連、反スターリンであったが、教条的な反共主義者ではなかった。『カール・マルクス』(KM)の著者でもある彼は、マッカーシズムから注意深く——やや臆病さを伴って——距離を置いた (Igra-

したがって、バーリンの「20世紀の政治思想」——上掲のケナン宛の手紙は、ケナンが同論考の感想をバーリンに書き送った、その手紙に対する返答である——の結論部における以下の一節は、当時の文脈におけるリベラルなエートスの端的な表明として読むことが許されるだろう。

われわれは自由と、自由の擁護や最小限度の福祉のために必要な組織の、どちらも犠牲にはできない。したがって、このディレンマから逃れる道は、論理的にはしまりのない、柔軟で、曖昧でさえあるような妥協にこそなければならない。かつてカントが言ったように、「人間性という曲がった木材からは決して真直ぐなものは作れない」以上、どのような状況にも、それに適した特殊な政策が必要なのである。時代の必要とするものは、(しばしば言われるように)もっと大きな信仰でも、強力なリーダーシップでも、より科学的な組織でもない。むしろその反対に、より少ないメシア的情熱、より多くの啓蒙された懐疑、各人の特質に対する大きな寛容……である。求められているのは、たとえどれほど合理的な、ないしは正しいとされる原理であるにしても、一般的原理を応用するときには、あまり機械的にならぬよう、熱烈になりすぎぬようにすることであり、たとえ是認され、科学的にテストされた解決であっても、まだ試したことのない個々の場合に一般的原理を適用する場合には、より深い思慮をもって、自己を過信しないことである。⁽⁷⁵⁾

「⁽⁷⁶⁾極端な時代におけるバランスの技法」と形容されるこうした知的姿勢

tiEFF 1998: 193/211)。英国共産党員であった歴史家エリック・ホブズボームは彼の生涯にわたる友人であった (L-IV 460, エヴァンス 2021: 下124頁)。

(75) L 92/164. 訳文一部変更。

(76) Craiutu 2017, Gaddis 2018: chapter 10.

は、今日では、価値多元的社會における相互に相容れない諸々の理想や必要を折り合わせるための実践的な智慧として、当時とは異なる状況の下で再び注目されている。⁽⁷⁷⁾ 冷戦期におけるリベラルの遺産を今後どのように用いるか、それはわれわれ次第であろう。

(b) リアリティ感覚と歴史感覚

バーリンやケナンが冷戦初期に発揮した「リアリティ感覚」は、当然のことながら、当時の特殊な政治状況に対応するものであり、その妥当性が異なる状況においても等しく担保されるわけではない。たとえば、2017年公開の映画『ザ・ポスト』（邦題『ペンタゴン・ペーパーズ／最高機密文書』）は、冷戦初期に得たその世界観が時を経て妥当性を失いつつある時期に、若い世代の告発を受けて当惑するロバート・マクナマラの姿を描いていると見ることもできる。同様に、上述の CCF および『エンカウンター』誌もまた冷戦初期の世界観と組織原理の下で活動を続けた結果、次第に後の世代には受け入れ難い、厄介な、時代錯誤的な遺物と化していったのだと結論付けることができるだろう。⁽⁷⁸⁾

しかしながら、この結論には一定の留保が必要である。1960年代の西側諸国におけるニューレフトの若者たちにとって、冷戦初期の世界観はすでに「時代錯誤の」ものであったかもしれないが、他の一部の人びとにとっては依然として否定しがたい「現実」であった。バーリンのチチュレ社会・政治理論教授就任講演「二つの自由概念」が執り行われた1958年、作曲家のドミトリー・ショスタコーヴィチは名誉音楽博士号授与式のためにオックスフォードを訪問したが、それは依然として緊張に満ちたものであった。ソ連政府は国外における彼の一举手一投足を監視し、その発言を精査していたのである。このときバーリンは、スターリ

(77) Cf. Crowder 2019, Hall 2020.

(78) Cf. Wilford 2003: 300, Caute 2013: 209-211. コートは CCF を「文化的マーシャル・プラン」と形容している。

ンの大粛清期を生き延びたこの客人を自邸に迎え入れた。⁽⁷⁹⁾バーリンもまた1945年のソ連訪問の際には当局から英国のスパイではないかと疑われていた。彼がロシアの国民的詩人アンナ・アフマートヴァと面会したことはスターリンを激怒させ、それが遠因となってモスクワに住む彼の叔父にあたる栄養学者のレオ・バーリンは1952年にスパイ活動の嫌疑で逮

(79) Ignatieff 1998: 232-233/252. このときの模様はバーリン自身が書簡にて詳細に記している (1958年6月28日付, Rowland Burdon-Muller 宛, L-II 637-641; see also SO, Owens 2015)。バーリンの知的姿勢にはショスタコーヴィチのそれと共通するところがある。スターリン体制の下で作曲活動を続けたショスタコーヴィチは、当時のソ連市民の過酷な生活状況とスターリンによる大粛清の現実を目にすることなくソ連を賛美する西欧の親ソ「ヒューマニスト」たち(バーナード・ショウ, ロマン・ロラン, アンドレ・マルローら)に対する怒りをあらわにしていたという (Volkov 1981: 153-154/405-407, 猪木 2021: 244-245頁)。また両者はともに1917年のペトログラードで革命を経験している。当時8歳のバーリンがそこで警官の激しい暴力を目撃して以来、彼が生涯にわたり暴力に対する恐怖を抱くようになったという逸話は有名であるが (B&J 4/15), バーリンより3歳年上のショスタコーヴィチもまた彼とまったく同種の経験を記憶していた。「わたしの生涯における重大事件は1917年4月, レーニンがペトログラードに到着したときにフィンランド駅まで行進したことであり、とみなされている。〔中略〕それよりもっとはっきり覚えているのは、ほかの事件である。それは同じ年の2月に起こったことだった。通りでは群衆が追い散らされていた。コサックが一人の少年を斬り殺した。ひじょうに恐ろしい光景だった。……あの少年が忘れられなかった。これから先も、決して忘れられないだろう」(Volkov 1981: 4/28-29)。周知のように、ヴォルコフの『証言』の真贋をめぐる論争はいまだ最終的な決着を見せていない。たとえば上記のロシア革命におけるショスタコーヴィチの経験について、ローレル・E・ファーイは、「10歳の子供がそうした虐殺の場面を実際に目にしたのかどうかは疑ってよいだろう」との懐疑的な見方を示している (ファーイ 2005: 31)。しかしながら、ショスタコーヴィチよりも年下のバーリンが同様の経験をしたという彼自身の証言に対する疑義はこれまで提出されていない。いずれにせよ、『証言』が描き出したショスタコーヴィチの知的および政治的態度は、バーリンがオックスフォードで受けた彼の印象と整合的であるように思われる。

捕され、自白するまで拷問を受けた。⁽⁸⁰⁾ 同じく1958年、ボリス・パステルナークのノーベル文学賞受賞をソ連政府が辞退させるという事件が起きた。バーリンは彼と（1945年と1956年の二度にわたり）面会した数少ない西側の人物のひとりであった。最初の機会には『ドクトル・ジバゴ』の最初の構想を記したものをオックスフォードに住むパステルナークの姉妹に、二度目にはその完成稿をミラノ共産党の出版社フェルトリネッリの代理人に、それぞれ届けている。⁽⁸¹⁾ 1950年代のバーリンがソヴィエト・ロシア関連のいくつかの論文を偽名で公表した背景には、それらがソ連当局の目に留まり、在ソ連の親族や友人たちを危険に晒すことへの危惧があったのである。

「冷戦」はその後もかれらの現実であり続けた。1970年にノーベル文学賞を受賞したアレクサンドル・ソルジェニツィンは、1973年にパリで『収容所群島』の第1巻を出版したことでソヴィエト政府から激しく非難され、翌年には同国から追放された。ショスタコーヴィチの親しい友人でもあるチェロ奏者のムスティスラフ・ロストロポーヴィチは、ソルジェニツィンを擁護したことで演奏活動を停止させられ、1974年の亡命によりソ連を去った。アフマートヴァの詩集『レクイエム』のソ連における発禁処分が解かれたのはそのさらに後、1987年のことであった。したがって、『エンカウンター』誌を告発した人びとがリアリティ感覚をそなえており、告発された側はそれを失っていた、と単純に割り切ることができるわけではない。両者は言わば別々の現実を生きていたのである。

冷戦の思想的遺産を継承する作業に取り組む際には、歴史研究一般におけるのと同様に、過去の出来事を特定の歴史観に基づいて単純に断罪したり、逆に無批判に受け入れたりすることを慎み、過去をその多様な様相の下で把握する努力を——もちろん、「理解することは必ずしも

(80) Ignatieff 1998: 168-169/184-185, ヴォルコフ 2018: 356頁。

(81) PI 378, 394/ II 193, 208.

許すことではない」(L229/412)のではあるが——怠るべきではない。現代の諸々の政治的現実およびイデオロギーと地続きである冷戦期の思想研究に携わる者は、この点にとりわけ敏感である必要があるだろう。

むすびにかえて

本稿では以下のことが確認された。第一に、1940年代から50年代におけるバーリンの多様な「政治的」活動は、いわゆる文化冷戦の枠組みの下で適切に理解される。第二に、『エンカウンター』に寄稿されたバーリンの諸論考、および「事件」をめぐるバーリンの反応は、彼のプロパガンダの意図ではなく、むしろ彼の一貫した知的姿勢を明るみにする。第三に、冷戦初期におけるバーリンのリベラリズムの核となる要素は、(スターリニズムに代表される)極端な社会状況において極端さや暴力を避ける知的および政治的な平衡感覚——これは彼の言う「リアリティ感覚」のひとつの現実態でもある——に存する。

最後に、以上の考察と今日のリベラリズム研究との接点を一瞥することで本稿を閉じることにしたい。当時のバーリンが全体主義思想を「反一元論」として批判した点はたしかに、冷戦初期の西側諸国の知的雰囲気のある程度反映したものであるかもしれない。この点で彼はラッセル、ポパー、タルモンらと大きく異なるところはない。しかしながら「20世紀の政治思想」を公表した時点で、すでにバーリンはリベラリズムが初期近代以来の一貫した伝統であるという見方に懐疑的であった。彼はそうした進歩史観と与せず、その後のロマン主義研究の中でも「18世紀の後半3分の1の時期」にヨーロッパで生じた諸価値の一大転換に注目し、これを強調した。⁽⁸²⁾ここから彼は、啓蒙主義に対する安易な賞賛に基づくリベラリズムの擁護と与せず、むしろ啓蒙思想家たちの楽観的展望の背後で蠢いていた非合理的な諸力——彼はその典型をロマン主義思想に見

(82) RR 84/129.

出した——を理解することに専心した。⁽⁸³⁾ 今日振り返ってみると、この点
はバーリンに痛烈な批判を加えたジェレミー・ウォルドロン⁽⁸⁴⁾の啓蒙観—
バーリンは啓蒙の肯定的側面、とりわけリベラルな立憲主義の遺産を
まったく看過している——に、深刻な一撃を加えるものではなからうか。⁽⁸⁴⁾
ダンカン・ベルの議論を借用すれば、リベラリズムの起源を忘却し、
ジョン・ロックを祀り上げて西洋文明の自画自賛を繰り返しているのは、
むしろ現代の政治理論家たちのほうなのである。⁽⁸⁵⁾

参考文献

アイザiah・バーリンの著作

B&J: Isaiah Berlin & Ramin Jahanbegloo, *Conversation with Isaiah Berlin* (Peter Halban, 1992). / 河合秀和訳『ある思想史家の回想』みすず書房, 1993年。

FIB: *Freedom and Its Betrayal*, ed. by Henry Hardy (Princeton University Press, 2002).

GK: 'A Letter to George Kennan', in L, pp.336-344. / 小田川大典訳「ジョージ・ケナンへの手紙」, 『思想』2021年6月号, 80-92頁。

HF: *The Hedgehog and Fox*, ed. by Henry Hardy, with a foreword by Michael Ignatieff (Princeton University Press, 2013). / 河合秀和訳『ハリネズミと狐』岩波書店, 1997年。

IBVL: Isaiah Berlin Virtual Library, Wolfson College, Oxford University (<http://berlin.wolf.ox.ac.uk/>)

KM: *Karl Marx: His Life and Environment* (Thornton Butterworth, 1939).

L: *Liberty*, corrected paperback ed., ed. by Henry Hardy (Oxford University Press, 2017). / 小川晃一ほか訳『自由論』みすず書房, 1997年。

L-I: *Letters 1928-1946*, ed. by Henry Hardy (Cambridge University Press, 2004).

L-II: *Enlightening: Letters 1946-1960*, ed. by Henry Hardy and Jennifer Holmes (Chatto & Windus, 2009).

(83) Cf. 森 2018 : 159-169頁。

(84) Woldron 2016. ウォルドロンのバーリン批判については、森 2019, 山岡 2021 : 31-33を参照。

(85) Cf. Bell 2014: 703/32.

- L-III : *Building : Letters 1960-1975*, ed. by Henry Hardy and Mark Pottle (Chatto & Windus, 2013).
- L-IV : *Affirming : Letters 1975-1997*, ed. by Henry Hardy and Mark Pottle (Chatto & Windus, 2015).
- MS. Berlin: Sir Isaiah Berlin Papers, Bodleian Library, Oxford University.
- PI : *Personal Impressions*, 3rd ed., ed. by Henry Hardy, with a foreword by Hermione Lee (Princeton University Press, 2014).
- POI : *The Power of Ideas*, 2nd ed., ed. by Henry Hardy, with a foreword by Avishai Margalit (Princeton University Press, 2013).
- RR : *The Roots of Romanticism*, ed. by Henry Hardy (Chatto & Windus, 1999).
/ 田中治男訳『バーリン ロマン主義講義』岩波書店, 2000年。
- RT : *Russian Thinkers*, ed. by Henry Hardy and Aileen Kelly (Penguin Books, 1994).
- SM : *The Soviet Mind : Russian Culture under Communism*, ed. by Henry Hardy (Brookings Institute Press, 2004); Brookings Classic edition, foreword by Strobe Talbott (Brookings Institute Press, 2016).
- SO : 'Shostakovich at Oxford', *The New York Review of Books*, 16 July 2009, pp. 22-23.
- SR : *The Sense of Reality*, 2nd ed., ed. by Henry Hardy, with a foreword by Timothy Snider (Princeton University Press, 2019).

日本語選集

- II : 福田歓一・河合秀和編『時代と回想 バーリン選集2』岩波書店, 1983年。

その他の文献

- Ali, Tariq. 2013. 'Isaac and Isaiah: The Covert Punishment of a Cold War Heretic by David Caute – review', *The Guardian*, 20 June 2013.
- Aldous, Richard. 2017. *Schlesinger: The Imperial Historian* (W. W. Norton).
- Arblaster, Anthony. 1971. 'Vision and Revision: A Note on the Text of Isaiah Berlin's *Four Essays on Liberty*', *Political Studies* 19(1), pp. 81-86.
- Baum, Bruce & Nichols, Robert (eds). 2013. *Isaiah Berlin and the Politics of Freedom: "Two Concepts of Liberty" 50 Years Later* (Routledge).
- Bell, Duncan. 2014. 'What is Liberalism?' *Political Theory* 42(6), pp. 682-715.
/ 馬路智仁・古田拓也・上村剛訳「リベラリズムとは何か」, 『思想』2021年4月号, 7-46頁。
- Brightman, Carol (ed). 1995. *Between Friends: The Correspondence of Hannah*

- Arendt and Mary McCarthy 1949–1975* (Harcourt Brace & Company). / 佐藤佐和子訳『アーレント＝マッカーシー往復書簡——知的生活のスカウトたち』法政大学出版局, 1999年。
- Caute, David. 2003. *The Dancer Defects: The Struggle for Cultural Supremacy during the Cold War* (Oxford University Press).
- . 2010. *Politics and the Novel during the Cold War* (Transaction Publishers).
- . 2013. *Isaac and Isaiah: The Covert Punishment of a Cold War Heretic* (Yale University Press).
- Cherniss, Joshua L. 2013. *A Mind and Its Time: The Development of Isaiah Berlin's Political Thought* (Oxford University Press).
- . 2018. 'Isaiah Berlin', in Schuett & Hollingworth (eds) 2018.
- . 2019. 'Isaiah Berlin and Reinhold Niebuhr: Cold War Liberalism as an Intellectual Ethos,' in Müller (ed.) 2019, pp. 11–36.
- Cherniss, Joshua L. & Hardy, Henry (eds). 2018. *The Cambridge Companion to Isaiah Berlin* (Cambridge University Press).
- Craft, Robert. 1972. *Stravinsky: Chronicle of a Friendship 1948–1971* (Alfred A. Knopf). / 小藤隆志訳『ストラヴィンスキー 友情の日々』青土社, 1998年。
- Craiutu, Aurelian. 2017. *Faces of Moderation: The Art of Balance in an Age of Extremes* (University of Pennsylvania Press).
- Crowder, George. 2013. 'In Defense of Berlin: A Reply to James Tully,' in Baum & Nichols 2013, pp. 52–69.
- . 2019. *The Problem of Value Pluralism* (Routledge).
- Deutscher, Isaac. 1955. 'Determinists All', *Observer*, 16 January 1955, p. 8.
- Dubnov, Arie M. 2012. *Isaiah Berlin: The Journey of a Jewish Liberal* (Palgrave Macmillan).
- Gaddis, John Lewis. 1997. *We Now Know: Rethinking Cold War History* (Clarendon Press). / 『歴史としての冷戦——力と平和の追求』赤木完爾ほか訳, 慶応義塾大学出版会, 2004年。
- . 2011. *George F. Kenan: An American Life* (Penguin).
- . 2018. *On Grand Strategy* (Penguin). / 村井章子訳『大戦略論』早川書房, 2018年。
- Hall, Edward. 2020. *Value, Conflict, and Order: Berlin, Hampshire, Williams, and the Realist Revival in Political Theory* (the University of Chicago Press).
- Hiruta, Kei. 2021. *Hannah Arendt and Isaiah Berlin: Freedom, Politics and Humanity* (Princeton University Press).

- Hitchens, Christopher. 1998. 'Moderation or Death' (review of Ignatieff 1998 and György Dalos, *The Guest from the Future*), *London Review of Books*, vol. 20, no. 23 (26 November 1998).
- Ignatieff, Michael. 1998. *Isaiah Berlin: A Life* (Metropolitan Books). / 石塚雅彦・藤田雄二訳『アイザイア・バーリン』みすず書房, 2004年。
- Ionescu, Ghița & Gellner, Ernest (eds). 1969. *Populism: its Meanings and National Characteristics* (Weidenfeld & Nicolson).
- Judt, Tony. 2005. *Postwar: A History of Europe Since 1945* (Penguin). / 森元醇訳『ヨーロッパ戦後史(上・下)』みすず書房, 2008年。
- Kaiser, Robert G. 2013. Review of Cauter 2013, *Washington Post*, 28 September 2013.
- Kelly, Aileen. 2001. 'A Revolutionary without Fanaticism', in Mark Lilla, Ronald Dworkin, & Robert B. Silvers (eds), *The Legacy of Isaiah Berlin* (The New York Review of Books), pp. 3-30.
- Lasch, Christopher. 1967. 'The Cultural Cold War', *The Nation*, 11 September 1967, pp. 198-212. / 上原和夫訳「文化自由会議の実体」〔抄訳〕, 『朝日ジャーナル』1967年12月17日号, 82-85頁, 12月24日号, 22-25頁。
- Lukacs, John. 2007. *George Kennan: A Study of Character* (Yale University Press). / 菅英樹訳『評伝 ジョージ・ケナン——対ソ「封じ込め」の提唱者』法政大学出版局, 2011年。
- Müller, Jan-Werner (ed). 2019. *Isaiah Berlin's Cold War Liberalism* (Palgrave Macmillan).
- Owens, Lewis. 2015. 'Like A Chemist from Canada: Shostakovich, Isaiah Berlin and Oxford', in IBVL (<https://berlin.wolf.ox.ac.uk/lists/onib/owens/LACFC.pdf>), accessed 7 July 2022.
- Passin, Herbert (ed). 1956. *Cultural Freedom in Asia* (Congress for Cultural Freedom, the Charles E. Tuttle Company).
- Rosenblatt, Herena. 2018. *The Lost History of Liberalism: from Ancient Rome to the Twenty-First Century* (Princeton University Press). / 川上洋平・三牧聖子訳『リベラリズム 失われた歴史と現在』青土社, 2020年。
- Sagar, Rahul & Sabl, Andrew (eds). 2018. *Realism in Political Theory* (Routledge).
- Said, Edward. 1996. *Representations of the Intellectual* (Vintage Books). / 大橋洋一訳『知識人とは何か』平凡社ライブラリー, 1998年。
- . 2000. *The End of the Peace Process: Oslo and After* (Pantheon Books).
- Saunders, Frances Stonor. 1999a. *Who Paid the Piper? The CIA and the Cultural Cold War* (Granta).

- . 1999b. *The Cultural Cold War: The CIA and the World of Arts and Letters* (The New York Press).
- . 2014. ‘The Writer and the Valet’, *London Review of Books*, vol. 36 no. 18 (25 September 2014).
- Schlesinger, Andrew & Schlesinger, Stephen (eds). 2013. *The Letters of Arthur Schlesinger, Jr.* (Random House).
- Schlesinger, Arthur, Jr. 1949. *The Vital Center: The Politics of Freedom* (Houghton Mifflin).
- . 2013. *The Letters of Arthur Schlesinger, Jr.*, ed. by Andrew Schlesinger & Stephen Schlesinger (Random House).
- Schuett, Robert & Hollingworth, Miles (eds). 2018. *The Edinburgh Companion to Political Realism* (Edinburgh University Press).
- Scott-Smith, Giles & Krabbendam, Hans (eds). 2003. *The Cultural Cold War in Western Europe 1945–1960* (Frank Cass).
- Shapiro, Ian & Steinmetz, Alicia. 2018. ‘Negative Liberty and the Cold War,’ in Cherniss & Smith (eds) 2018, pp. 192–211.
- Tully, James. 2013. “‘Two Concepts of Liberty’ in Context,” in Baum & Nichols 2013, pp. 23–51.
- Volkov, Solomon (ed). 1981. *Testimony: The Memories of Dmitri Shostakovich* (Faber and Faber). / 水野忠夫訳『ショスタコーヴィチの証言』中央公論新社, 1986年。
- Vries, Tity de. 2012. ‘The 1967 Central Intelligence Agency Scandal: Catalyst in a Transforming Relationship between State and People’, *The Journal of American History*, March 2012, pp. 1075–92.
- Waldron, Jeremy. 2016. ‘Isaiah Berlin’s Neglect of Enlightenment Constitutionalism,’ in Laurence Brockliss & Ritchie Robertson (eds), *Isaiah Berlin and the Enlightenment* (Oxford University Press), pp. 205–219.
- Walicki, Andrzej. 2007. ‘Berlin and the Russian Intelligentsia’, in George Crowder & Henry Hardy (eds), *The One and the Many: Reading Isaiah Berlin* (Prometheus Books), pp. 47–71.
- Wilford, Hugh. 2003. *The CIA, the British Left and the Cold War*, foreword by David Cauter (Routledge).
- Wolf, Daniel. 2021. ‘Cold War in the Rear-View Mirror: Boris Pasternak, Isaiah Berlin and the Publication of Dr Zhivago’, *The Article*, 21 February 2021 (<https://www.thearticle.com/cold-war-in-the-rear-view-mirror-boris-pasternak-isaiah-berlin-and-the-publication-of-dr-zhivago>), accessed 19 March 2021.

- 井上弘貴 2020『アメリカ保守主義の思想史』青土社。
- 猪木武徳 2021『社会思想としてのクラシック音楽』新潮社。
- ヴォルコフ, ソロモン 2018『ショスタコーヴィチとスターリン』亀山郁夫・梅津紀雄・前田和泉・古川哲訳, 慶應義塾大学出版会。
- エヴァンス, リチャード J. 2021『エリック・ホブズボーム——歴史の中の人生(上・下)』木畑洋一監訳, 岩波書店。
- 貴志俊彦・土屋由香(編) 2009『文化冷戦の時代——アメリカとアジア』国際書院。
- 木部敬 2014「バーリンのゲルツェン論——個人, 自由, 現実感覚」, 『ロシア思想史研究』第5巻, 3-27頁。
- コート, D. 1970『ヨーロッパの左翼』河合秀和訳, 平凡社。
- 齋藤嘉臣 2013『文化冷戦の浸透史——イギリスのプロパガンダと演劇性』勁草書房。
- 沼野雄司 2021『現代音楽史——闘争しつづける芸術のゆくえ』中公新書。
- 濱真一郎 2017「バーリン自由論とゲルツェン——ロシアにおけるドイツ・ロマン主義」, 『同志社法學』第68巻8号, 3319-3339頁。
- ファーイ, ローレル・E. 2005『ショスタコーヴィチ——ある生涯 [改訂新版]』藤岡啓介・佐々木千恵訳, アルファベータ。
- 福中冬子 2008「沈黙する〈聖人〉, 抽象化された〈哀歌〉——〈文化的自由のための会議〉に見る, 二〇世紀音楽における冷戦ポリティックスの射程」, 『人文科学』(慶應義塾大学)第23号, 243-273頁。
- 藤田文子 2015『アメリカ文化外交と日本——冷戦期の文化と人の交流』東京大学出版会。
- 細谷雄一 2005『大英帝国の外交官』筑摩書房。
- 堀邦維 2000『ニューヨーク知識人——ユダヤ的知性とアメリカ文化』彩流社。
- 2007「文化自由会議と欧米ユダヤ系知識人」, 『ユダヤ・イスラエル研究』第22号, 51-59頁。
- 2016「文化自由会議と戦後日本」, 『日本大学芸術学部紀要』第63号, 21-27頁。
- 仁井田崇 2021「『ハリネズミと狐』におけるトルストイ解釈について」, 『思想』2021年6月号, 62-79頁。
- 村上東(編) 2014『冷戦とアメリカ——覇権国家の文化装置』臨川書店。
- 森達也 2016「書評: Arie M. Dubnov, Isaiah Berlin: *The Journey of a Jewish Liberal* 他」, 『ユダヤ・イスラエル研究』第30号, 73-76頁。
- 2018『思想の政治学——アイザイア・バーリン研究』早稲田大学出版部。

アイザイア・バーリンと文化自由会議

- 2019 「アイザイア・バーリンと政治的リアリズムの潮流」、『政治哲学』第25号, 1-25頁。
- 山岡龍一 2019 「方法論かエートスか?—政治理論におけるリアリズムとは何か」、『政治研究』(九州大学)第66号, 1-31頁。
- 2021 「規範理論家としてのバーリン—冷戦リベラルからリベラルリアリストへ」、『思想』2021年6月号, 27-50頁。

※本研究は JSPS 科研費 21K01322 の助成を受けたものです。